

▼ 「友なり、師なり、仏なり」

人生において「友」を得ることほど大きな喜びはない。友はかけがえのない宝である。

しかし、ここで「友」というのは、「私にはたくさんの友だちがあつて…」というような、単なる知り合い、好ましい人、仲間、同窓生、同郷のよしみといったような人を指すのではない。そうではなくて、その人の存在すること自体が私にとって大きな意味をもつような人。どんなことでも語り合える人。困ったとき、問題が起こったときに、その人と話し合うだけで、いや話さなくてもその人と会うだけで、問題は解決しなくても、その問題を荷い、それに立ち向かう勇気が湧いてくるような人。それが異性であれば必ず恋愛関係に発展するような人との関わりを指す。

こういう「友」はまた、やがて畏怖の念を抱くような存在ともなる。その人には決して嘘はつけない。その人のまなざしが私の身口意の三業をあたたく、しかし厳しく見つめている、少なくとも私はそう感じる。さらに私にはその友に教えられるという思いがたえず湧いてくる。友の生き方に学ぶという姿勢が私に生まれてくる。むろん相互に反発や批判の対象ともなる。そのことをニーチェは「汝、友のうちなる敵を敬し得るや」と表現している。そこにはなれ合いやもたれかかりの怠惰な心をぴしりと打つ三十棒（禅宗の座禅のときに使う棒）のひびきがある。友のうちに「師」を見出すこと、これは一層深められた友情である。（中略）

田舎の寺の住職として一生を仏法に捧げた大河内了悟なる人は、「友なり、師なり、仏なり」という言葉を、友であり、師であり、仏となった友、宮城智定に贈った。宮城智定はそれに応えて、「そして一緒に墜ちるなり」と書いたという。 大河内 了義

▼ なぜナチスを阻止できなかったのか —マルチン・ニーメラー牧師の告白—

ナチスが共産主義者を攻撃したとき、自分はすこし不安であったが、とにかく自分は共産主義者でなかった。だからなにも行動にでなかった。

次にナチスは社会主義者を攻撃した。自分はさらに不安を感じたが、社会主義者でなかったから何も行動にでなかった。

それからナチスは学校、新聞、ユダヤ人等をどんどん攻撃し、自分はそのたびにいつも不安を感じましたが、それでもなお行動にでることはなかった。

それからナチスは教会を攻撃した。自分は牧師であった。だからたつて行動にでたが、そのときはすでにおそかった。（丸山真男『現代政治の思想と行動』未来社）

- ▼ 真実に生きようとすれば 現実から袋だたきにされ
 現実には生きようとすれば 真実に背を向けねばならぬ。
 それは 真実にも 現実にも
 生きたことのない者の 予断であろう。
 真実に拠って 現実を歩み 現実立って 真実を証する。
 このたのもしく確かな大道を もろともに 往こう。（和田 稔）